

塚本恭章 著
『経済学の冒険
ブックレビュー&ガイド100』

読書人
2023年、651pp.

田中英明
Hideaki Tanaka
滋賀大学 経済学部 / 教授

本書には、経済学の書籍を対象に、著者がこの15年もの間に「週刊読書人」などの書評専門紙や週刊誌などに寄稿してきた書評に基づいた60冊分のブックレビューと40本のブックガイドが収められている。またその合間には、経済学史などを担当している大学の教員である著者の、恩師や本との出会い、書評とそのリアクション、またゼミでの指導などをめぐる体験談が「間奏曲」としてちりばめられている。さらに、レビューに登場する経済学者77名（ただし77番目はなぜかテニス界のレジェンド）の「人物ガイド」、そしてレビュー対象とした著作の著者である経済学者12名からの本書への「リアクション」までもが用意されている。

こうした工夫のもと、目次やページをばらばらとめくり、気になった一節に目をとめ、その「関連レビュー」として紹介された先に進む……、いつしか読者は、経済学というものがいったい何を問題とし、いかに論じてきたのかを、自らの興味や関心を再確認しつつ知ることになる。そして、経済学に関する書籍を読むことが、それを書いた・そこに書かれた経済学者との出会いと対話であること、そして複数の書籍を対比し、相違や共通性を考えることが、新たな観点や発想の生じる場を今ここに創り出す刺激的な行為であることを一歩少なくともその一端を体験することになるのである。

現代の経済学が取り組んできた、繰り返されるバブルと金融危機や慢性的停滞、格差や貧困の再拡大、深刻な環境破壊……、こうした諸課題が

自由放任・規制緩和・自己責任を掲げた新自由主義的な政策路線と、それを支えてきた主流派の新古典派経済理論の帰結であり、問われているのはその総括と、それらをこえるための「集会的努力 collective effort」の結集であることを、本書は多様な書籍のレビューを通じて教えてくれる。「リアクション」で何人もの大学教員が指摘しているように、最近の大学の経済学教育の「一元化」や主流派による「独占」が進むなかでこうした課題にふれることは、なぜ経済学を学ぶのかを問い直し、いわゆるコースワークの次に何に取り組むべきかを考えさせるものであり、学生や経済学の初学者にとっても大きな意義があろう。

ただ、そうした学びのための「ツアー・ガイド」としては、一見すると取り上げられている学説や立場が非主流派や異端とされるものに偏りすぎているようにも思われよう。その背景に、「一冊をつうじて、一本の『経済学史』とするような本になることを強く願いながら」（プロローグ）本書を編んだ著者による選書があることは確かである。しかし、補章として再録されている著者による「週刊読書人」年末回顧号（2016～2022年）の「経済学」をそれぞれの年を思い返しながらかくと、この7年間に話題になった経済学の書籍は軒並み本書のブックレビューやブックガイドに取り上げられていることがわかる。つまりは、主流派の経済学の立場から、経済理論の深い解説や、現代経済の動きや働

きに取り組んだ書籍そのものが少ないのであり、「日本の知的世界のそうした歪み」(塩沢由典)の反映でもあろう。街の本屋でも、かつて学生のみならず社会人などにも広く読まれていたマルクス派等の書籍の減少は主流派の書籍におされたものではなく、経済書や他の分野の書籍に置き換えられて「経済学」分野のコーナーそのものが縮小している。

その一因は、経済学でも専門分化が進み、現代経済の総体的な把握を問うような研究が困難となるとともに、学術的な評価の場が国際的な英文学術誌に特化されていることにある。他の学問・科学分野と同様に、狭い専門分野での研究者間の相互評価こそが学術的な評価であって、研究者の評価は「Σ掲載誌のインパクトファクター×掲載点数」ですまされることになる(八木紀一郎)。しかし、経済学の場合は、その科学的成果の実社会への影響の大きな部分は、新たな規制策にせよ、あるいは規制緩和や規制の撤廃にせよ、政策を通じたものである。審議会等の場を通じた専門家支配、ましてや学会内での権威を笠に着て政策ブレーンとしてその実、個人的な主義・思想で政治に影響を及ぼすといった状況は望ましいものではなからう。

本書を丹念に読めば、主流派の経済学のなかでも、自由放任主義・市場万能論は決して主流ではなく、多くの経済学者が「市場の失敗」に真摯に向き合ってきたことがうかがえる。専門分化自体も、合理的経済人を「主体」とする経済学の方法そのものへの懐疑と、それを克服するための諸分野との学際的研究によって促されてきた面もある。それだけに、書籍を通じて一般の人々に研究の成果を伝える努力や、広範な議論のもとに現実の経済社会を改善していく努力を怠ってはならない。これらも「集会的努力」の一環であり、そこでは著者

の一般紙における書評という実践の意義も、さらに大きなものとなるであろう。

さて、本書の巻末には「特別編」として、根井雅弘『経済学とは何か』と森岡孝二『雇用身分社会』の書評論文、伊藤誠との『入門 資本主義経済』をめぐる対談、そして岩井克人の最終講義についての文章が掲載されている。

根井への書評では、多様な経済思想を学ぶことの意義として、「唯一の思想・理論が正しいとみなす特権的で崇拜的な思考様式」を抑止する弾力性に富んだ経済学観と、「寛容の精神」の会得が強調され、著者が自らの「経済学史」を諸課題に対する「集会的努力」の結集に資するものとして組み立てるために根井から学ぼうとしている姿勢を感じ取ることができる。だが、根井によるフリードマン経済哲学の取扱いに対する著者の批判からも分かるように、根底的な批判と寛容の両立は困難をともない、競争性・多様性を「共創性」に移行させることは容易ではない。

著者が本書で最も多く取り上げ、その独自の「経済学史」から学ぼうとしている岩井克人も、その魅力は主流の新古典派理論のみならず、「経済学的思考」そのものを彼岸に切り分ける鮮やかな切断にこそあり、経済学の「分断」を推し進める役割も果たしてきた。また、岩井に限らず「純粋な理論」を追求しようとする試み自体が、必然的に他の学派との切断をもたらすことも否めない。

社会科学者の「集会的努力」の場はどのように確保されるのか。労働・雇用問題に長年にわたり真摯に取り組んだ森岡のように、現実の「病理と病巣」から「資本主義」そのものに対峙すること。「直接的人格関係としての共同体の破壊」という資本主義の基本傾向から、経済の停滞とともに少子化などの「自然と人間の破壊」(伊藤)の総体的

な把握をすすめること。あるいは、本書で繰り返し印象的に登場する宇沢弘文の「社会的共通資本」や、ポランニー的な非市場領域や「制度」などの概念的把握を通じて……。『特別編』は諸学派の「共創性」や「集合的努力」の媒介を求める著者の格闘の記録でもあろう。そして著者は、そうした意味合いで岩井の「信任」論に大きな期待をかけているように思われる。

エビローグには、著者の次なる冒険として「『競合する経済思想－資本主義と社会主義との知的格闘から』と題する学術研究書」の刊行が考えられていることが示されている。待ち遠しい限りである。

